■ 巻 頭 言 ■

「エネルギー・資源」創刊当時の思い出

エネルギー・資源研究会常任理事
摂南大学工学部教授
京都大学名誉教授
佐　藤　　俊

エネルギーおよび資源の乏しい我が国において，これらに関する諸研究を一段と進展させ，これらの問題の解決に資するため，官・産・学三者の緊密な協力と，情報交換や共通の場での討議による相互の連携を図ることをめざして，本研究会が設立を見て5年を経過しようとしている．この第1期ともいえる5年間，本会が順調に発展して来たことは誠に御同慶に耐えない．5周年を迎えるに当って，会誌「エネルギー・資源」の創刊当時の様子を振りかえって見るのも，あながち意味のない事でもなかろうと考え，思いつくままを簡単に記すことにする．

本会創立当時，産・学・官の間の充分な協力・討議の場が是非とも必要であろうとの意見が数人の関係者の間で論議され，本会設立の準備に入ったが，その間の事情は他の記述にゆずることにして，私も本会の設立を要望し，準備段階から討議に加わった一人として，本会誌の編集の世話をするようにとの要請を受けた．生来の人のよさから，軽々にお引受けしたが，いざ具体的な編集を考えてみて，これが，限られた専門分野に携って来た私ごときが，一人や二人では決しかねるいくつかの難問をかかえていることに，大いにとまどいを感じたが，既に後の祭で，ために周囲の方々に随分と御苦労・御迷惑をおかけすることとなった．

まず，学会誌は何といっても全会員と直接つながりを持つ唯一のメディヤであり，学会の顔とも言えるものであるだけに，全会員に出来るだけ満足して頂け，会員に利するものであるためには，どんな編集方針で望むべきかが問題である．私自身，それ迄に，いくらかの学会の会誌や論文集の編集を手伝った経験がない訳ではないが，エネルギーや資源の問題のように，余りにも広く，且つ多岐に亘る関連分野にまたがり，立場を異にする各界の会員全体に興味を持たれる会誌を作り上げると言う事になると，従来の専門化された特定の学問分野に基盤をおいた学会におけるあり方とは異った取組みを必要とし，既に発刊されていたエネルギーや資源に関係のある専門学会のそれらをふまえ乍ら，本会独自の目的にかなった特徴を出すことの出来る会誌を新たに刊行することは必ずしも容易な問題ではない．

もう一つの大きな問題は時間的制約であった．正式に本会が創立発足して，僅か1ケ月と言う，考え方によっては非常識とも言える短期日の間に創刊号を出版すると言う点である．創刊号は，各方向

からのエネルギー問題の将来の展望を概説して頂くことで，本会設立の意義と現状の認識・位置づけを試みると言うことでスタートしたが，第2号以降で上記の方向づけと本誌の特徴づけを行うと言う重要方針の決定をせまられていた訳であって，準備段階を含め，再々編集実行委員会を開催し，上記の方向づけや本会企画の諸行事との調和といった大きな基本的問題の決定や，表紙を含めて，体裁のあり方や原稿依頼，査読方法など細部に亘る編集の具体化をはからねばならず，諤々の議論が続いた．

このような無理な時間的制約の中で，創刊号から数号の本誌が，勿論細かい点で多くの御不満な点があったとしても，曲りなりにも本筋として，会員・読者のそこそこのご期待に添い得，本日迄の本誌のたたき台として，それなりの成果を収めえたと言えるならば，これ偏えに，企画編集委員や会員の諸氏の温い御支援の賜であり，また執筆に御無理を願った著者の方々の御協力は言うまでもないが，特に，至らざる初代編集実行委員長の私を直接御援助下さった編集実行委員会のメンバーの方々並びに事務局職員が，度重なる委員会に御多忙中を無理を押して集って頂き，終始熱心に貴重な討議を重ね，おしまず御尽力を賜った御蔭であると，更めて心から感謝の意を表する次第である．

近年，石油原油の供給が順調で，エネルギーや資源問題への関心や研究への熱意が薄れつつあるかに感じられるのは誠に心外にたえない所で，決してこれらの問題が解決を見た訳でもなく，多くの研究成果はむしろ将来への展望につながらないことを明らかにしつつあると言っても過言ではなく，より真剣に，より総括的な立場で取組むべき時期にあるのではと考えるのは筆者の独断であろうか．このような背景のもとで，本会も5年を経てある意味での曲り角に来ていると言えるのではないだろうか．会員諸氏の従来にもましての御協力により，本会並びに本誌の一層の充実・発展を切に祈るものである．